◇震災を経て　悲しみを力に（下）＝東大教授　島薗進　追悼文化、静かに展開［原文提供不可］
◎東京新聞　２０１１年０６月１８日　朝刊◇２１面　見出し３段

生きる

震災を経て

悲しみを力に　下

追悼文化、静かに展開

島薗　進

東日本大震災は私たちに悲しみから力を生みだそうとする文化のあり方を思い出させてくれている。文芸や芸能はそのよい例だが、近代以前の文芸や芸能は宗教と関わるところが大きかった。日本人は悲しみに深い宗教的な意味を見いだしてきたが、近代化を経てその伝統はどう継承されてきたのだろうか。

＊

そもそも仏教は悲しみに強い関心を寄せる宗教だ。それは「無常」という言葉によく表れている。ゴータマ・ブッダは生老病死を苦と観じて、その根本を克服するための修行生活に入ったと伝えられる。ブッダの死との関わりはその誕生のときから始まっている。母マーヤー夫人がお産後、数日にして亡くなったという。仏教が説く「無常」はすべての存在、とりわけ生き物が永遠の存在ではないこと、移り変わり過ぎ行くものであることを意味する。死があってこその生であり、「生」（誕生）と「死」が裏腹のものなのだ。痛切な喪失の悲しみを味わうことで無常を知る。それは自らの死を強く意識することでもある。無常を知ることが出家をすること、発心することの重要なきっかけと考えられた。

仏教が葬式と結びついたのは日本古来の祖先崇拝と結びついたためで、仏教本来のものではないと説く学者もいる。しかし、死に思いをいたし、死別の悲しみに耐えながら生きる力を育もうとする精神は仏教本来の無常の教えに通じている。

平安時代末期から鎌倉時代初期の乱世に生きた鴨長明は『方丈記』で「朝に死に、夕に生まるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける」と説き、強大な浄土真宗本願寺教団の基礎を築いた十五世紀の蓮如は、「白骨の御文章」とよばれる書簡で「されば朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり」と無常を悟り、死すべき身であることを強く意識することを説いていた。

死を強く意識することで民衆に浸透した日本仏教は、死者をしのぶ文化と結びついて発展することになった。キリシタンを排除しようとした江戸幕府によって、十七世紀には死者を葬るとともに家の先祖を祀る儀礼を仏教寺院が独占する檀家制度が確立した。それによって死者をしのぶ「仏事」「法事」が人々の日常生活に深く根付いていくことになった。親族集団や地域社会とお寺がいったいとなって悲しみを力に転ずる文化を担ってきた。

＊

だが、二十世紀も末になると親族集団や地域社会の絆が弱まり、お寺と個々の檀家との関わりも薄まっていった。東日本大震災が襲うすぐ前の一年ほどの間、葬式の省略や簡易化がさかんに論じられた。確かに大都会では「仏事」「法事」が形式化し、心のこもらぬものになる傾向が目立った。儀礼を通して「十分に悲しむ」こと、そのことによって「生きる力を育むこと」が難しくなって来ているという議論が力を増していた。

東日本大震災後の経過を見ると、少なくとも東北・北関東地方では必ずしもそうともいえないようだ。お寺が地域社会と強い絆をもっており、悲しみを力に変える場として今なお機能している地域が多いように感じられる。だが、その東北地方も時代の変化の作用は免れえない。東北・北関東地方でも伝統的な行事だけでは「十分に悲しむ」経験を得られないと感ずる人が少なからずいることだろう。それらの人々の気持ちを反映して新たな悪霊・追悼の形態が、あるいは「悲しみを力に変える」文化が展開してくることだろう。

すでに現れている新たな特徴は、宗派・宗教の枠を超えた追悼の文化である。たとえば、仙台では医療関係者と仏教、キリスト教、神道、新宗教などの諸教団が協力して「心の相談室」が立ち上げられた。震災で亡くなった方の葬送のお世話をするために諸教団が協力してきたのだが、さらに死別の悲しみに苦れている方々のお世話をするためにも協力しようというものだ。

＊

阪神・淡路大震災のときも宗教や宗派を超えて「悲しみを力に」していこうとする動きがあった。だが、それはまだ一地域の動きにとどまっていた。その後、末期がん患者や自殺者遺族のための宗教・宗派を超えたスピリチュアルケアやグリーフケアの動きが広がっていった。東日本大震災の「悲しみを力にしていく」これまでのさまざまな点と線の動きを面へと広げていくきっかけになるかもしれない。日本の悲しみの文化の大きな展開が静かに進んでいる。（しまその・すすむ＝東大教授）

※東京新聞社の許可を得て掲載しております。
無断で転載・複写することを禁じます。